琉球大学学術リポジトリ

# 音楽療法的アプローチによる音楽教育実践の試み
## ―小学校レベルで考える―



| メタデータ | 言語: |
| --- | --- |
| | 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター |
| | 公開日: 2008-11-14 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 伊志嶺, 朝次, Ishimine, Choji |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/7890 |

琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要　第1号　1993年10月

# 音楽療法的アプローチによる音楽教育実践の試み
## ―小学校レベルで考える―

伊志嶺　朝　次

（1993年6月30日受理）

本稿は筆者が巻末に示した紀要論文などで展開した音楽療法的見地に基づく音楽教育理念について、教育実践の可能性を示唆したものである。

歌唱教材として「こいのぼり」、「ぞうさん」、「とんび」の3曲を、また鑑賞教材として「ピーターと狼」をとりあげた。基本的には表現に対して鑑賞が現在の取扱いよりもっと重視されるべきとする観点から、聴取活動の場面を増やすための工夫を展開した。その観点から「こいのぼり」ではテンポを速めたり遅くしたりして風の吹き具合を連想させ、また同主短調では雨に濡れたこいのぼりとの繋がりをイメージできるだろうとした。「ぞうさん」では主としてピッチ（オクターブ）がものの大きさや重量感と関連する要素であることから、通常の歌唱のほかイメージごっことして高いオクターブでは小さい象のイメージとなり、低いオクターブでは大きい象、あるいはお父さん象などといった授業展開の可能性を示した。

## はじめに

本稿は、筆者が琉球大学教育学部紀要論文などにおいて、音楽療法的視点から試論的に展開した音楽教育論に基づいて、実践のイメージをシミュレイトしてみたものである。現行の音楽教育を支えている教育理念は「芸術（＝美）を通しての音楽教育」という立場に立っているのに対して、筆者の立場は、「音楽に美的要素だけでなく、音楽がもつその他の心理学的、生理学的属性も除外しない」というものである。この論拠は次のような見解に基づいている。「音楽が美的要素と官能的要素を同じに含み、現実では否定されている本能的欲求を音楽の中で充足できる点を強調している。本能と精神の和解、あるいはイドと超自我の和解が、音楽によって達成されるのである。」（アルトシューラー）「音楽の生理学・心理学的効果、その社会的・教育的属性は、音楽をまったくユニークな世界に位置付けるものである。」（山松質文）

現在の音楽教育方法では、学習指導要領の示すところに従って、表現、鑑賞の2領域のうち、圧倒的に表現重視の内容になっている。表現領域における内容の量の多さからすれば、当然そうならざるをえないだろう。音楽療法の方法にはアルトシューラーの「きく行為」による立場とシアーズの「きく行為」による立場の2つの治療原理があるとされている。本稿の筆者はアルトシューラーの「きく行為」による治療原理を支持する立場をとるが、その理由は「する行為」では、音楽以外の社会学的要素が入り込みやすい考えるからである。したがって筆者の立場によれば、「きく行為」の指導原理に従って鑑賞をこそ重視すべきであるとの考え方に立つ。ただし、シアーズの「する行為」による音楽効

※琉球大学教育学部（音楽科）

果の側面を否定するものでは決してない。音楽はもともと表現と鑑賞の２つの領域によって成り立っているからである。問題はその取り扱い方の割合である。表現と鑑賞の取り扱い方の割合をどれくらいにするのかについては、もっと慎重な考察が必要だと考えられるので今後の課題とし、本稿ではとり合えず現在一般的に行われている割合よりも、鑑賞領域の取扱いを増やすことを主張するだけにとどめておきたい。ただし、ここでは鑑賞の概念を緩やかに理解したいと考えている。appreciationだけでなくlistenningまで含めて、概念の幅を広げておくことも音楽療法的立場が要請するものだと考えるからである。本論に入る前に、もう一つだけ私見のよりどころとしている山松の見解を引用しておきたい。「むしろ才能の如何を問わず、音楽学習的色彩より音楽享受的色彩、学ぶことにより楽しむことに主眼をおくという方針で、すべての子供たちに接することが大切だと思うからである。」筆者の音楽的療法的アプローチはまさにこのような見解を論拠としていることを付言しておきたい。

**教材「こいのぼり」八長調３／４拍子**

教材についての考察

低学年においては数少ない３／４拍子の教材である。ミレドレの歌い出しの容易さ、平明な５音音階で歌い易く、理にかなった旋律の構造、そして３／４拍子の軽快な動きを伴った拍子感とリズム感など、古典的な美しさと優しさを備えたすぐれた教材である。

この教材が３／４拍子でしかも動きのあるリズムでできていることから、作者はこの曲を「元気よく風に泳ぐこいのぼり」のイメージで作ったのであろう。通常の指導は作者のそのイメージに添って行われるものである。与えられた楽曲の原像に次第に近づいていくことこそが、音楽学習の本質であるから当然である。ただし指導に際しては次のようなことも考慮しておくべきであろう。

現在のわれわれの生活のなかではこいのぼりを掲げている家庭も少なくなってしまった。それでもちらほらではあるが、こいのぼりが風に泳いでいる様子を見ることはまだできる。こいのぼりの様子はその日の天気の具合によって見え方は一様ではない。上天気でも、風のない日は尾鰭を少しふるだけで、ややぶら下がり気味に見えるだろう。また、例えば薄曇りで風のある日には、こいのぼりが横になびくように、勢いよく泳いでいる様子が見えるだろう。雨の日にずぶ濡れになって泳げないでいるこいのぼりは、寂しげにあるいは哀れっぽく見えることだろう。これらを考慮に入れると、通常の指導法の他に次のようなことが方法として考えられる。

音楽療法的指導

通常の指導過程では、「こいのぼり」の（一般的な）様子を思い浮かべながら（元気よく）歌ったり、タタ タン タンのリズムを感じたりしながら、拍子打ちができるように注意が払われるだろう。あるいは拍子に合わせて体を揺らしながら、拍子を体で感じるような指導が考えられる。

それに対して、療法的指導法を意図するとすれば、通常のやり方の他に、「今日はどのような天気か」また「風の吹き具合はどうか」などの質問の後、こんな日にはこいのぼりはどのような泳ぎ方をするのかなど子供たちに尋ねた後、この質問をきっかけにして、さまざまな天気の条件（天気がよく穏やかな日、天気で風が強い日、蒸し暑く風がない日、雨の日、風雨が強い日などなど）によってこいのぼりがどのように見え、またそれぞれの条件に従って、それぞれ情景をどのように感じるかを子供たちにイメージしてみるように求める。このプロセスでは子供たちは創造力を刺激されることになるだろう。その過程を裏返しにして、範歌や範奏を通してテンポを変えたり、調性を同主調にかえたりして、それぞれの場合にこいのぼりの様子がどんな感じを与えるかを尋ねたみる。予想されるイメージとしてはallegrettoでは普通の歌詞通りの「おもしろそうに　およいでる」様子を想起し、またallegroでは竿がたわむほど風が強く

竿がたわむ程にこいのぼりがはためく様子を思い浮かべるだろう。andanteでは風が弱くこいのぼりの尾鰭がわずかに揺れる様子を想起し、同主短調では雨でびしょ濡れになって、泳げないでいる寂しそうなこいのぼりのイメージを心に描くことだろう。

さらに授業を展開すると、この教材の一拍目の8分音符2つを4分音符に置き換えれば4／4拍子になる。この2つの拍子を比較することによって、3／4が4／4拍子に較べてどれほど軽快なリズムであるかを感じ取ることが容易になる。このような過程を経ることによって、この教材の拍子感やリズム感は実感として感得されるはずである。この過程は、もちろん範唱（範奏）だけに止めることもできるし、クラスで歌唱として試みることもできるだろう。どこまでやるかはクラスの状況やレベルによる。これらの過程を通して子供たちは音楽の調性やテンポ、あるいは拍子の違いを、理屈抜きに実感することができる。いずれにしても、経験として多角的になることは間違いない。このような指導課程を採る時、子供たちに対しては決して負担になることはなく、負担になるとすれば教師の側だけである。実際には負担といったようなものではなく、教師の能力の問題である。したがって、ここで提示しているような指導方法ふをクラス担任に求めるのはおそらく実際的ではなく、実施するとすれば音楽専科の教師の方法として考えるのが無理がない。

**歌唱教材「ぞうさん」ヘ長調　3／4拍子**

教材の考察

小学校低学年の教材では数少ない3／4拍子のこの教材は、やはりずっしりとした動物がゆっくり動くイメージとして3拍子という拍子を選んだものと考えられる。低学年ではゆっくりしたテンポはやや特殊であり、そのために像のイメージと結びつけることによって、3／4の拍子感と同時にテンポ感の学習も可能にしている。作者はもちろん一般的なイメージとしての「ぞうさん」を描いているだろう。したがってこの教材の原像に従えば、与えられた適切な拍子感、テンポ感やリズム感で、歌ったり音楽に合わせて体を揺らしたりするような学習活動になるだろう。またこの教材には♩. ♪♩のリズムパターンと相俟ってすぐれて拍子感の明確さがあるところから、拍子感が学習内容として重要である。またテンポも象という動物のイメージと結びつけて感得させたい。筆者の描く音楽療法的学習方法によれば、それらの通常の指導過程の他に音楽の別な側面と関連して授業の展開を考えることができる。

音楽療法的指導法

作者がイメージした音楽の原像は一般的イメージでの象である。しかし象にはお父さん象、お母さん象、子供の象（あるいは赤ちゃん象）といろいろある。そこまでイメージを展開すると、普通に歌うだけでは十分でなくなる。それらのイメージは主としてはピッチ感と結びつくものである。すなわち、小さい、軽い、可愛いなどのイメージは高音域と結びつき、ずっしりとした重たいイメージは低音域の印象である。したがって、聴取活動としては「ぞうさん」を歌唱の音域（1点オクターブの音域）で（一応ピアノで）弾いて聞かせた後、1オクターブづつ高くして行って、それぞれがどんなぞうさんのイメージになるのかを問う。期待される答は、オクターブが高くなるごとに小さいぞうさん、子供のぞうさん、赤ちゃんぞうさんなどであろう。低音に向かっても同様なことを試みる。そこでは大人のぞうさん、お父さんぞうさん、もっと大きいぞうさんなどであろう。ピッチにテンポの要素を加味すると、それぞれのイメージは増幅されるだろう。つまり、3点、4点オクターブでテンポをはやめて演奏すれば、ちょこちょこ走り回る小ぞうのイメージになるだろうし、下1点オクターブでゆっくり演奏すれば、のっしのっしと歩くもっと大きいぞうさんのイメージに繋がるであろう。

一般に、低い音域で遅く演奏すると重量感をともない、高い音域、速いテンポで奏される音楽は、軽量のイメージと結びつく。かくして、

サンサーンスの「動物の謝肉祭」の中の白鳥は高音の楽器ではなく、中低音のチェロで奏され、象はさらに低音のコントラバスで表現される。

音楽療法的な方法による「ぞうさん」の学習では、単に与えられた音域で歌唱（演奏）するだけでなく、聴取活動の一つとして（便宜上ピアノでとしておく。もちろん、電子ピアノやシンセサイザーのような音色の作れる楽器はそれなりのメリットもある）低音域で奏したり（大きなぞうさんのイメージ）高音域で奏したり（小さいぞうさん）して、ピッチ、テンポなどの要素を加味することによって、音楽的効果に関する感性をも取り扱う。それらの加味された聴取活動によって、単なる歌唱指導にとどまらず、さらに創造性を刺激することに繋がるものと考える。

**歌唱教材「とんび」ハ長調　4／4拍子**

教材について

古典的優雅さをもった形式の整った教材である。ひと昔前まではとんびが悠然と輪を描きながら大空を舞う風景が見られたが、いまではその姿を見ることは（住んでいる地域にもよるが）ほんとうに少なくなってしまった。それを現実の風景としてみるためには、ビデオやフィルムにでも頼るしかないだろう。したがって、その情景を心に思い描くための何らかの工夫がなされなければならないだろう。イマージネイションとしては、とんびは一羽であったり2、3羽の複数の場合もあるだろう。ここは子供たちに尋ねることによって、いろいろな場面を想定することができる。

♩. ♪ ♫ ♫ | ♩ ♩のリズム型で上昇する歌い始めの部分と、ゆったりとしたテンポはこの教材の優雅さととくに関わっている。この教材の優れた情景描写はピンヨロの繰り返しで示されるが、ここの取り扱いかたはとくに指導の質を左右する大事な部分である。終局部分の「たのしげにをかいて」は、この教材の叙情性を高めて豊かな余韻を残す部分として、指導に当たってはとくに大事にしたいところである。療法的な指導としてはテンポとダイナミックスをいろいろと変えることによって、異なった場面と結びつけることができる。以下それについて考えて見たい。

音楽療法的指導法

通常の指導法としてはおそらく、美しい歌唱（優美な歌いかた）を心がけるという観点の他、情景描写としてピンヨロの強弱を一つ二つ工夫する程度で止まってしまうだろう。とんびが悠然と大空を飛行する情景は主としてテンポの感覚である。一度指定テンポで感じ取られた曲想をテンポを少しはやめたり、あるいは遅くしたりして見ることによって、速めのテンポでは悠然とした飛行の感じにはなりにくく、またとんびのような大型の鳥のイメージとは結び付きにくいことに気がつくだろう。これらのプロセスはピアノかその他の鍵盤楽器などを使っていくつかのテンポで弾いて提示し、想像力を刺激しながら児童と先生の問答を展開していくことができる。

またダイナミックスについては、ピンヨロの部分は強弱に関連して、「遠くまた近く」の他、「高くまた低く」も考えられ、漸増、漸減に関連しては、遠くのとんびが「次第に近づく」情景や「次第に遠のいていく」情景を思い描くこともできる。具体的には、例えば次のようにである。

1　「ピンヨロ（mf）ピンヨロ（p）ピンヨロ　（mf）ピンヨロ（p）」
2　1の順序を反対に
3　「ピンヨロ（mf）ピンヨロ（mf）ピンヨロ（p）ピンヨロ（p）」
4　3の順序に反対に
5　「ピンヨロ　ピンヨロ　ピンヨロ　ピンヨロ（全体cresc or dim）
6　「ピンヨロ　ピンヨロ（cresc.）ピンヨロ　ピンヨロ（dim）
7　6の順序を反対になどなど

1は「近くまた遠く」または「低くまた高く」、2は「遠くまた近く」というイメージとして受け取られるだろう。2は当然その反対のイメー

ジに繋がるだろう。5は次第に近付く、あるいは次第に遠ざかるイメージであり、6は次第に近づき、また遠のくイメージとして受け取られるだろう。それらは聴取活動としての方が観察しやすい。表現活動としては観察のゆとりがないと思われるからである。また以上の方法をどれだけやるかは、当然授業計画によって任意である。

それらの活動を通して、子供たちはダイナミックス、テンポなどの要素が音楽の表現にどのように関わっているかを、経験的、具体的に感得できるはずである。

## 鑑賞教材「ピーターと狼」

### 教材に関する一般的考察

音色は前述の高低、速度、音量のような物理的性質よりむしろ生理的に感じ取ることのできるものである。例えば大まかには、木管楽器の優しさ（柔らかさ）、金管楽器の力強さ、弦楽器の高貴さ（アポロ的性質）、打楽器の騒音楽器としての荒々しい（たまには衝撃的）音色は生理的に聞き分けられるものではある。「ピーターと狼」に登場するキャラクターのうちピーターの元気で快活、勇気のある好ましい（あるいは汚れなき）少年というイメージは弦楽器の合奏で表されている。それは楽器がもともと帯びている性質の一つである。「小鳥」とフルートの音色の結びつきも一般的である。「猫」とクラリネットの結びつきは、この楽器の低音域がビロードのような感触として感じられるところから、猫の毛ざわりとしてのイメージと繋がることは自然であろう。「あひる」のだみ声がオーボーで表されることも生理的に感じとることができる。ファゴットで表される「おじいさん」も老人の低いしわがれ声と容易に結びつく。「狼」を表すホルンの合奏は、ホルンという楽器の力強さとあいまって、狼という獣の迫力やすごみとして感じることは容易であろう。「狩人」が狩人の象徴である鉄砲の音と結びつくことはまったく生理的に自然である。

以上容易に観察されるとおり、大まかには音色は生理的直感と結びついて理解し得る要素である。しかもこの教材の場合それぞれのキャラクターを表す各テーマの音楽性が、音色の持つ特徴を一層引き立てているので教材としてすぐれている。

### 音楽療法的指導法の工夫

鑑賞教材「ピーターと狼」の場合は、各キャラクターの置かれた場面にしたがって多くの変奏が準備されているので、それらの変奏の条件を変えてみたり、音色をイメージ的に他の楽器と置き換えてみたりすることによって、楽器の表現の適切さをその過程を経ない場合より、よりよく実感できるはずである。例えば、狼の接近で動物たちが慌てふためいている様子は、テンポの変化として表現されている。猫が慌てて木に駆け上る様子や、小鳥の慌てふためいている様子が、急速なテンポを伴った変奏であ表されている。もし、それぞれのキャラクターのテーマが、最初に提示されたテンポのまま演奏されたとしたらどうなるだろうか、といったことをイメージして比較してみる（想像力を働かせる）あるいは、少年ピーターのテーマがゆっくりと演奏された場合、はたして快活で元気のいい少年のイメージに繋がるだろうか、などのやり取りを通して、快活さや元気さが快適なテンポと関わり合っていることに気付くようになるだろう。

音色については、そのキャラクターを表すためにあてがわれている楽器を他の楽器と置き換えてみたらどんな感じになるか、といったような一種のイマージネーションごっこを通して、子供たちの想像力をかきたてることができる。このようなイマージネーションを求められるような過程は、自然に楽曲の創造の本質に迫るものである。

以上触れた指導のポイントの他、この曲を聞いて何を感じるのか。例えばピーターはどんな少年なのか、またおじいさんはどんな感じの人なのかといった質問を通して、楽曲の醸し出す気分や雰囲気といったようなものを感じ取る学習が可能となるだろう。また、一日のうち、ど

んな時間帯（朝、昼、晩）あるいはどんな時に（例えば元気を出したい時など）聞きたいのかなどの質問は療法的に音楽に接する態度に繋がるだろう。

## おわりに

テンポ、ピッチ、ダイナミックスなどの音楽の要素は、物理的な性質と結ぶつけて感じられるものである。したがってそれらの音楽要素は、通常の経験と関連して指導することのできる性質である。

まず、ダイナミックスについて言えば、遠くの音源から発せられる音は小さく聞こえ、近くのものは大きく聞こえるというようにである。また壁の内側は大きく聞こえ、壁の向こう側は小さく聞こえる。例えば「ピーターと狼」の中で、狼にのみ込まれたあひるの悲鳴のような泣き声がかすかに聞こえてくるシーンは、壁向こうから聞こえる音である。また子供たちの経験に則して言えば、音量の大小は「元気がいい」「元気がない」のイメージに繋がることもある。われわれは普通「○○さん。声が小さいです。元気がありませんね。」あるいは「もっと元気よく。大きな声で。」というような表現を使う。また例えばcrescendoはものが次第に近づくイメージに繋がるし、逆にdecrescendoはものが遠のく印象と結びつく。われわれ共通の経験は、遠くでかすかに聞こえ始めて次第に自分に近づき、そして遠のいていく救急車のサイレンの音であろう。

ピッチの物理的性質は、一般的には高いピッチは軽い、小さいなどのイメージと結びつく。したがってピッコロ、フルートなどの高音楽器がその役割を担う。その性質が小鳥のイメージと自然に結びつく。それに対して低いピッチは大きい、重いなどの印象を伴ってチューバ、コントラバスなどの低音楽器の表現領域と関わるようになる。そのようにして大型の鳥である白鳥は中低音のチェロで表される。　テンポは動くものすべてのものの動きが音楽の速度感と同質のものとして経験される。その結果「くまんばちの飛行」は速く動くものの例であり、サンサーンスの「動物の謝肉祭」の亀は緩やかに動くものの例として直感的に理解される。またオネゲルの「機関車パシフィック231」は重量感と加速のイメージとして容易に理解されるだろう。

音色は「ピーターと狼」のところで触れただけで止めておきたいと思う。

既述した音楽の諸要素は、正常な聴覚を持っている限りにおいてだれでも、音楽経験を離れたところで、普通の生活経験として既知のものであり、それらを通して音楽が表わすものを体得していくことは、方法的に具体的で分かりやすいだろう。また音楽療法的な音楽学習理論とも一致するものである。音楽の諸要素が音楽のムードを作り出すのにどのように関わっているかということを、より具体的に感得することによって、音楽の表現と人間の音楽的欲求の関連をよりよく知ることができるようになると仮定している。

参考文献

＊音楽理念再考への試み　　伊志嶺朝次
琉球大学教育学部紀要第40集1992、3
＊音楽の効果について　　伊志嶺朝次
琉球大学教育学部紀要第41集1992、11
＊音楽療法的アプローチによる音楽教育について　　伊志嶺朝次　　琉球大学教育学部紀要　第42集　1993、3
＊音楽教育における諸問題についー考察
伊志嶺朝次　　琉球大学教育学部音楽科論集　第1集　1993、3